

イメージのネットワークを問いなおす——「元寇」と『黒い雨』

中野和典

二〇一六年三月一日に九州大学西新プラザで開かれた名古屋大学と九州大学の大学院生を主体とする合同研究会に、私の勤める福岡大学の大学院生と一緒に参加する機会を得た。会の最後にそれぞれの教員が一〇分ずつ話題提供をした上で会場全体で議論する「教員セッション」というプログラムがあった。そのテーマは「東アジア文化と／のネットワーク」。私も「いま・ここからイメージのネットワークを問いなおす——「元寇」を手がかりに」と題して話をした。当日は東アジアからの留学生が多く参加していたこと、また会場が福岡市の西新であったことから選んだ題目だったが、結果的に二〇一四年八月に奇しくも名古屋大学で開催した第四五回原爆文学研究会の『黒い雨』再読（詳細は本誌一三号を「覽いたきたい」にもつながる話になったので、ここにエッセイとして紹介したい。

なお、私の中で「いま・ここ」につながる問題として元寇の話題が浮かんだのは、本研究会の会員でもある畑中佳恵氏のご論考「九州の記憶としての元寇」（松本常彦・大島明秀編『九州という思想』花書院、二〇〇七・五）を数年前に読んでいたからである。また、畑中佳恵氏のご論考にも、後に触れる越前谷宏氏のご論考

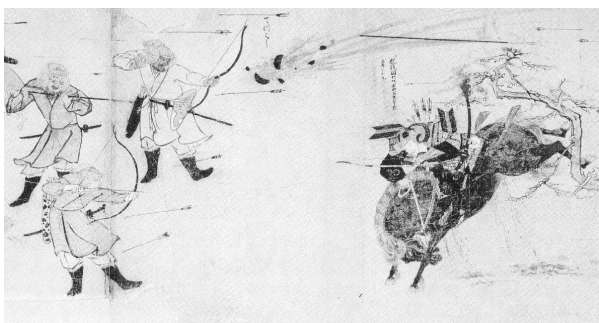
にも引用されている川添昭二氏の元寇研究のもとになった膨大な図書や資料が、これも奇しくも私の勤める福岡大学の図書館に寄贈され、「川添昭二文庫」として二〇一二年から公開されており、今回の問題について調べ、考える上で非常に参考になった。先人たちの学恩に心から御礼申し上げたい。

* * *

私のタイトルは「いま・ここからイメージのネットワークを問いなおす」です。今日はいろいろな場所から、福岡にお集まりいただいていますので、福岡という場所にちなんだ話題を提供したいと考えています。

サブタイトルは「元寇」を手がかりに」としています。元寇というのは、今から約七四〇年前に元と高麗の軍隊が二度（一二七四年と一二八一年）にわたって日本に攻め込んだ出来事を指す日本側の呼び名です。

上の図は元寇の模様を描いた「蒙古襲来絵詞」の一部です。日本で歴史教育を受けた人にとっては「元寇と言えばこれ！」と



『蒙古襲来絵図』(宮内庁三の丸尚蔵館所蔵)

いう形でほとんどアイコンになっていて鳥飼で描いたものと記されています。この道路の南側に今も鳥飼という地名が残っていますが、おおよそそのあたりでの戦いを描いた図であるということになります。また、二度目の戦い(弘安の役)のときに元・高麗軍が海から攻め込んでくるのを防ぐために作られた元寇防塁と呼ばれる防壁の一部が、福岡には数多く遺されています。

下の地図をご覧ください。

図です。元寇防塁がこの位置にあることから分かる通り、元寇当時の海岸線は今よりずっと内陸(南)の方にありました。一九八九年に福岡市制一〇〇周年を記念して開催されたアジア太平洋博覧会(通称・よかトピア)のために大規模な埋め立て工事が行われて大きく地形が変わっています。現在、福岡のランドマークになっている福岡タワーは、この博覧会のために建てられたものですし、福岡ドームなどもこの博覧会の跡地に建てられて現在に至ります。この地図を見れば分かる通り、今私たちは元寇防塁と



『福岡市大地図』(部分)(塔文社、1989年、中野一部加工)

海との境界に当たる場所に一堂に会して研究会を行っているということになります。

というわけで、これから元と高麗に日本が攻め込まれたことについて話をするわけですが、だから日本が中国や朝鮮を攻めたこともお互い様だよね、というような乱暴な話をしたいわけでは、もちろんありません。

鳥海靖は『日・中・韓・露 歴史教科書はこんなに違う』(扶桑社、二〇〇五・七)において(相手側の歴史の見方についての

無知・無理解は、現在の日韓・日中歴史問題にみられるように、往々にして非常に不毛で、時には有害な政治的対立を生み出すことにもなる。それを避けるには、国際的な歴史の相互理解をめざす自覚的な努力が、お互いに必要不可欠であろう。(略) 国際的な歴史の相互理解は、決して短時間で解決できるような問題ではない。いたずらに感情論に走って、拙速に結論を求めたり、成果があまりそうもないからといって、すぐにそれを無意味だと決めつけるような姿勢は、厳に戒めなければなるまい。じつくり時間をかけて、まず手始めに、相互の歴史理解や評価の違いをしつかりと見極める自覚的な努力から始めるべきであろう。(はじめに)と指摘しています。今日の私の話もこのような考えを前提としているのだとご理解いただければさいわいです。

その国の歴史認識を示すものとして歴史教科書が取り上げられ、その記述の仕方がしばしば論争の種になりますが、今回も歴史教科書を手がかりとして歴史認識の違いを見ていきたいと思えます。まずは日本の歴史教科書です。日本の高等学校の歴史教科書として最も多く採択されている山川出版の『詳説日本史』を見ると、鳥海が「元寇は、いうまでもなく、十三世紀後半の元・高麗軍による日本侵攻であり、当時の東アジア世界と日本とのかわりを示す重要な出来事であって、日本の歴史教科書の中では、かなりのページが割かれている」(前掲書、第二章)と指摘する通り、元寇については中世における日本と東アジアとの関わりを示す重要事項として大きく取り上げられています。

次に韓国の歴史教科書です。鳥海の調査によれば「韓国の『国史』教科書における元寇の取り扱いは、日本の教科書とは大き

く異なっている。モンゴル(元)と高麗との関係では、高麗がモンゴルの侵入に対していかにねばり強く戦ったかという点に重点がおかれている。(略) その反面、日本への侵攻についてはほとんど触れられていない。第6次(一九九二年六月告示の第6次教育課程——中野注)「国史」教科書では、簡潔ながら(略)「日本遠征」の「断行」と「失敗」が記述されていたのだが、第7次(一九九七年二月告示——中野注)教科書では、ほとんど削除されてしまった。(略) 倭寇や「壬辰倭乱」(豊臣秀吉の朝鮮出兵)のように、朝鮮が侵攻された場合の詳細な記述に比べると、元寇における韓国の教科書の記述は、いかにも偏っているという印象を免れない」(前掲書、第二章)という状況にあります。鳥海の本が出版された二〇〇五年当時、韓国では国定教科書が使われていましたが、後に国定制を廃止して検定制が導入されています(二〇〇七年発表、二〇一〇年度実施)。さらに現在、歴史教科書を再国定化しようとしているというので(二〇一五年発表、二〇一七年度実施予定)、韓国では歴史教科書の扱い方そのものが揺れています。私も近年日本で翻訳出版された二つの韓国の歴史教科書(三橋広夫他訳「韓国の中学校歴史教科書——中学校国定国史」明石書店、二〇〇五・八/三橋広夫他訳「検定版 韓国の歴史教科書——高等学校韓国史」明石書店、二〇一三・一一)を確認しましたが、どちらにも日本遠征/元寇についての記述は見つけられませんでした。

次に中国の歴史教科書です。これについて鳥海は「日本やベトナムなどに対する侵攻(元寇)については、一言半句も記述されていない」と調査結果を記し、「十四〜十六世紀、元末から明時代に中国大陸沿岸を襲った倭寇については(略)その討伐とあ

わせてかなり詳述に記述しているにもかかわらずである。これは、近年の国際的な常識からみても、ずいぶん偏った歴史の描き方のように思われるが、やはり中国における「愛国主義」歴史教育のあらわれなのであろう（前掲書第三章）と見解を示しています。私も日本で翻訳出版された中国の歴史教科書（小島普治他訳『中国の歴史——中国高等学校歴史教科書』明石書店二〇〇四・五）を確認しましたが、やはり日本遠征／元寇についての記述は見つけられませんでした。

では、日本における元寇の捉え方に問題がないかと言えば、そうではありません。日本において元寇がどのように研究されてきたかを調べた川添昭二は『蒙古襲来研究史論』（雄山閣出版、一九七七・二）の中で日本における元寇の研究に（一）江戸末期、（二）日清・日露戦争期、（三）一五年戦争期という大きく三つのピークがあったことを示した上で、元寇が「外国との緊張が高まると、それに対処する典拠のように回想され、そして一定の方向への国民思想形成のささえとされた。だから蒙古襲来の問題については、少なくとも昭和戦前期までは、時局的なものをばねにした研究や論説などが多かった」（第五章）と指摘しています。要するに、日本が海外から圧力を受ける、あるいはどこかの国と戦争をするというときに国威発揚のために持ち出されるのが「元寇という「国難」の記憶である、ということ」です。一五年戦争末期の「神風特攻隊」の「神風」という言葉も、元寇のときに暴風雨が起って、それが元・高麗軍に大打撃を与えた、という伝承に基づくものです。元寇のときに吹いた「神風」のイメージは、日本が神に護られた国であるという選民思想を広めるものとして大いに利用され

ました。

次に戦後小説において元寇の記憶がどのように語られているか、ということを見ます。「原爆文学」の代表作と見なされている井伏鱒二『黒い雨』（新潮社、一九六六・一〇）において、主人公・重松が、後に原子雲やきのご雲と呼ばれるようになる異様な雲について（中年の婦人）と語り合う場面は次のように語られています。

「あの雲のこと、みんな何雲と云うとるんですか。何雲でしょうか」

「何雲ですかなあ。鉄橋の手前の人たちのなかに、ムクリコクリの雲と云うとる人がおりました。ほんま、ムクリコクリがんすなあ。でもなあ、子供づれじゃあ横川鉄橋は渡れんでしょう」（略）

茸型の雲は、茸よりもクラゲに似た形であった。しかし、クラゲよりもまた動物的な活力があるかのように脚を震わせて、赤、紫、藍、緑と、クラゲの頭の色を変えながら、東南に向けて蔓延^{はびこ}って行く。ぐらぐらと煮えくり返る湯のように、中から中から湧^わき出しながら、猛^たり狂^りって今にも襲いかぶさって来るようである。蒙古^{ムンゴル}高句麗^{コリョ}の雲とはよく云^い得たものだ。さながら地獄からの使者ではないか。今までの宇宙のなかに、こんな怪しなものを湧^わき出させる権利を誰が持っているのだろうか。これでも自分は逃げのびられるのだろうか。これでも家族は助かるだろうか。今、自分は家族を助けに帰っていることになるのだろうか。一人避難していることになるのだろうか。

（第三章）

寺横武夫は「ムクリコクリの雲——「黒い雨」と「重松日記」と」（『国語通信』二〇〇一・九）において重松が原子雲を（蒙古高句麗の雲）と記していることについて（蒙古襲来の恐怖を、その具体性においてとらえるとともに、オノマトペ論という接点を介して両者は響きあっているといえないだろうか。（略）「ムクリコクリ」というこの一語の発生には一種のフォークエチモロジイ（俗間語源説）が介在していて、十三世紀、鎌倉時代の蒙古襲来が日本人の深層部に焼きつけた畏怖の念は、思いのほか強くかつ深いものとして記憶の識閥に生きながらえてきたことを予想させる。（略）二十世紀の空に突然噴出した理解不能な巨大雲を前にして、人々にできることといえばそれらを想起することだけだった。

（略）「重松日記」には登場しない、フォークロアの発想による「黒い雨」の作者に固有の対象把握法である」と論じています。つまり、『黒い雨』にある（むくむくと）という雲の状態を表す擬態語と蒙古高句麗を（ムクリコクリ）という言葉で表す民間伝承とが合わさった結果、重松は（蒙古高句麗の雲）と記しているという解釈です。

しかし、越前谷宏は「国語教科書の中の戦争——井伏鱒二『黒い雨』の場合——」（『龍谷大学論集』二〇〇五・一）において（巨大な原子雲の湧き出てくる）様子を「ムクリコクリ」と形容するだけなら凡庸にすぎないが、それに「蒙古高句麗」という意味外の漢字を当てたところに衝撃力がある。（略）「神風」命名の出自が「ふるさとのフォークロア」などでは決まっていないように、少なくとも近代以降、「ムクリコクリ」＝「蒙古高句麗」をめぐる言説は、きわめて意図的に反復され、増幅された政治的言説であ

ったといえよう。（略）重松もそうした国民的記憶から自由ではない」と論じています。つまり、重松が（中年の婦人）から異様な雲を（ムクリコクリの雲と云うとる人がおりました）」というのを聞き、それに（蒙古高句麗）という漢字を当てたのは、寺横が言うように民間伝承などでは決してなくて政治的な言説なのだということ。先ほど紹介した通り、元寇研究の三つ目のピークである十五年戦争期には元寇と「神風」のイメージが国威発揚の手段としてさまざまな書物や行事などを通して広められていました。原子雲をムクリコクリの雲と呼ぶことには、そういった同時代の政治的な言説が重松にしっかりと内面化されていることが表れているのだ、という指摘です。

この越前谷論は、重松の政治性を考える上で非常に重要なものですが、一点だけ修正すべきところもあります。ムクリコクリという言葉の用例を研究した今井秀和は「ムクリコクリについて」（『日本文学研究』二〇〇八・二）において（文献上見つけられる最も古い形はどうやらムクリだということ、次いでムクリコクリの形が表れるということである。（略）ムクリコクリは、ムクリコクリであった近世の時点ですでに児童語としての一面を持ち合わせていた。しかし、もちろんそれは後天的に足された属性である。（略）重要なのは、「むくりこくりの鬼が来る」という台詞が、小児をあやす際の替し文句として使われていたという点である。（略）ムクリコクリという言葉の示す意味は、近世文芸において、ときに更なる変化を遂げているのである。例えば、近松門左衛門（一六五三—一七二四）の台本において、ムクリコクリ＝理不尽、という連想から、この単語は甚だしく理不尽な状態を表現する際

にも用いられている。(略)蒙古・高句麗軍という実在の存在がムクリコクリそしてモクリコクリなどという得体の知れない化け物へと姿を変えた一方で、蒙古軍を敗走せしめた台風には「神風」の名が与えられ、これはこれで後世、本来の意味を超えた使い方をされるようになる」と指摘しています。つまり、時代が下るに従ってムクリコクリという言葉の指示内容が「蒙古高句麗」から「鬼」や「理不尽」へと拡大しているということです。このように用例をたどると、『黒い雨』の重松がムクリコクリという音に蒙古高句麗という言葉の漢字を当てることは、越前谷が指摘したように「意想外」のこととは言えず、むしろムクリコクリの語源を示す記述であったことが分かります。

中谷いずみは「専有された〈戦争の記憶〉——井伏鱒二「黒い雨」における〈庶民〉・〈天皇〉・〈被爆者〉——」（『日本近代文学』二〇一五・一一）において、重松が敗戦を知った場面、子ども頃にいじめられると母親の乳房を吸わせてもらっていたことを思い出していることに注目して、「いじめられて帰宅し母親の乳房で泣くという、いわば口唇期への退行体験が比喩として用いられている」と、重松の子どもへの退行を読み取っています。これとムクリコクリの雲の場面をセットで見ると、重松の退行はより明らかになります。先に挙げた今井の調査によれば、ムクリコクリという言葉は、近世においてすでに児童語の側面を持っていた。また、那須正幹は『時の石』（文溪堂、一九九四・五）の「第五話 ムクリ、コクリがくるぞ」の中で〈博多の町人にとつて、ムクリ、コクリの恐怖は生涯消えることがなかった。／博多では、夜泣きする子に、ムクリ、コクリがくるぞという子ど

もはたちまち泣きやんだという」と語っています。重松が原子雲を見上げて、それを児童語でもあるムクリコクリの雲と呼ぶことには、自分を子どもの位置に立たせようとする重松（より厳密に言えば、重松だけでなく、それをムクリコクリの雲と呼んだ〈鉄橋の手前の人〉や〈中年の婦人〉や〈若い女〉を含む人々）の欲望が表れていると言えます。その意味では、原子雲を見上げる場面で重松が〈ひとりぼっちとぼとぼ歩く小学一年生ぐらいの子供〉と〈道づれ〉になつてゐることは象徴的です。原子雲を〈ムクリコクリの雲〉と重松が記すことには、同時代の政治的な言説を内面化するだけでなく、自らを子どもの位置に立たせようとするという屈折した主体が表れていると言えます。

東アジア交渉史においてどのような出来事がどのようなイメージをとらえて記憶され、あるいは記憶されていないのかということを考えるときに、このような元寇のイメージのネットワークの接続と切断について考えるのは有効だと私は考えるのですが、みなさんはいかがでしょう。